

## 東北地方太平洋沖地震前後の大気電気学的変化について Atmospheric electricity changes around the 2011 off the Pacific coast of Tohoku Earth-quake

大山 佳織<sup>1\*</sup>, 服部 克巳<sup>1</sup>, 市川 卓<sup>1</sup>, 古屋 隆一<sup>2</sup>

OYAMA, Kaori<sup>1\*</sup>, HATTORI, Katsumi<sup>1</sup>, ICHIKAWA, Takashi<sup>1</sup>, FURUYA, Ryuichi<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 千葉大学大学院理学研究科, <sup>2</sup> コムシステム株式会社

<sup>1</sup>Cchiba Univ., <sup>2</sup>COM SYSTEM, INC.

我々は地圏 大気圏 電離圏結合 (LAI カップリング) の検証のため、東京都及び房総半島で大気電気学的パラメータを観測している。具体的には大気イオン濃度を東京都昭島市、千葉県鴨川市清澄山、内浦山の3地点で、大気電場を千葉市稲毛区の千葉大学西千葉キャンパス及び清澄山の2地点で観測している。清澄観測点では大気イオン濃度と大気電場に加えて気象要素(気温、湿度、降水量)を同時観測しているため、それぞれの値の変動の関係を検証できる。

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震後に、我々の観測点で得られた大気電気学的パラメータに顕著な変動が見られた。これは福島第一原子力発電所事故により大気中に放出された放射性物質に応答したものと考えられる。3月15日早朝の関東地方への放射性物質の到来に対応して、大気イオン濃度の上昇、大気電場の減少が観測された。各観測点で観測された大気電気学的パラメータに加え、データが公開されている最寄りのモニタリングポストの空間放射線量率を用いて値の変動について考察する。

詳細な解析結果は当日の発表にて報告する。